

1.1.3 学生の受け入れ

<2003年度に設定した目標>

神学部の理念・目的・教育目標に即した学生受け入れ態勢を構想し、その構想に適切な入試制度を設定する。そのために入試検討委員会を設置し検討を続ける。

1. AO入試の整備と充実

キリスト教宣教に従事し、将来のキリスト教会を担う人間を育成するために、単に学力にとどまらない幅広い才能・能力を評価する入試形態としてアドミッションズ・オフィス入試（AO入試）を、さらに整備・充実する。

2. 入試制度の在り方の検討とそのための調査

コース制の導入にともない幅広い関心をもった学生の受け入れが可能となっているが、キリスト教神学・伝道者コースとキリスト教思想・文化コースの所属学生のバランスが保たれ、多様な学生が共通の環境で学ぶことによって生まれるシナジーを喪失しないような入試制度を導入する。キリスト教神学・伝道者コースの学生と、キリスト教思想・文化コースの学生の適正割合につき検討を行う一方、アンケートや追跡調査を実施しながら、その目的を達するための多様な入試制度の導入を検討する。

3. 多様な背景を持った学生の受け入れ

社会人や外国人留学生など、さまざまな背景をもった学生を受け入れる。必要に応じて、そのための特別な入試施策を導入する。

4. 入試広報の充実による志願者確保

新しい入試制度の導入とともに、これを定着させ志願者を確保するための効果的な広報戦略を企画する。

5. 科目等履修生・聴講生の積極的受け入れ

近年の生涯学習熱の高まり、また職業上の専門化の動向から、科目等履修、聴講へのニーズが増してきている。神学部でも、積極的に科目等履修生および聴講生の受け入れ態勢を整えると同時に、そのような意欲をさらに高める施策を実施する。

【評価項目 5-0-1】 入学者受け入れ方針等

(必須要素) 入学者受け入れ方針と大学・学部等の理念・目的・教育目標との関係

(必須要素) 入学者受け入れ方針と入学者選抜方法、カリキュラムとの関係

(選択要素) 学部・学科等のカリキュラムと入試科目との関係

(現状の説明)

神学部では設立の目的として、キリスト教会における宣教活動を担う伝道者・学校教師などを掲げてきた。また2004年度より履修コース制を導入して、神学の近接領域に教育研究領域を拡充し、神学部の理念・目的・教育目標から、今日における宗教・キリスト教に対する高い関心に呼応する改革を行ってきた。そのため、2003年度までは、伝道者育成が基軸でありバプテスマ（洗礼）を受けた者に限って受験資格を認めてきたが、2004年度入試からは伝道者育成は、従来どおりの受験資格でキリスト教神学・伝道者コースの入学者として受け入れ、並行して、バプテスマ（洗礼）を受けたか否かを問わない一般入

試では、キリスト教思想・文化コースまたはキリスト教神学・伝道者コース（バプテスマを受領している者に限る）として受け入れるように改めた。

このような神学部の教育理念と教育目的にかなう優秀な学生を幅広く募るために、とりわけキリスト教伝道者を育成するという課題に応えるため、一般入学試験の他に、以下のような方法による募集・選抜を積極的に行っている。

入試形態については、一般入試を実施するほか、各種入試として、2003年度まで、一般公募推薦入試、社会人入試、外国人留学生入試、帰国生徒入試と志願者の資格別におこなってきたが、これら各種入試を抜本的に見直し、志願者のさまざまな個性を多角的視点から評価するために、原則、AO入試へと一元化している。

1. 推薦入学試験

推薦入学試験は、神学部の教育理念を理解し、伝道者育成という教育目的に沿おうとする強い意欲を持った優秀な学生を求めて行うものである。それは関西学院高等部、協定校、更に全国の特別指定校から推薦があった者に対して実施するものである。

2. 帰国生徒・外国人留学生入学試験（2004年度入試よりAO入試に一元化）

帰国生徒入学試験・外国人留学生入学試験は、国際化の時代に伴い、帰国生徒や日本に留学を希望する外国人生徒の数が増している中で、そうした生徒の受験希望を積極的に受け止め、受験機会を提供することによって、将来、国際感覚を持って国内で、また世界の各地で、神学部の教育理念に応じて働く有為な人材を育成したいという願いに基づいて行われている。

またそのような学生の受け入れが、神学部の教育活動や学生たちに対して、国際性の進展などの点で積極的な意義を生むことが期待されている。

3. 社会人入学試験（2004年度入試よりAO入試に一元化）

神学部の授業受講者の特徴は、様々な学歴や社会経験を持つ人々が数多く「聴講生」として、熱心に授業に取り組んでいることである。心の問題や魂の問題、生き方の問題というような、宗教的、倫理的事柄に深い関心を寄せる社会人の神学部に対する期待とニーズには大きなものがある。毎年若干名ながら、それまでの職業生活を中断し、あるいは定年退職後に新たな人生を始めようとして、神学部で正規学生としての学びを志す人々が受験している。少人数の学部の中で、こういった方々の存在の意味は大きく、若い学生達に混じって熱心に学ばれる姿は、共に学ぶ学生達にとっても、学部自体にとっても、よい刺激となっている。

社会人入学は、社会人で神学部を志願し、前述のような志を抱く人々を積極的に受け止めようとして実施するもので、神学部にとって、重要な入学試験の一つである。

4. 編入学試験

神学部では、大学・短大において他の学問領域を専攻したものの、その後、神学部での教育を希望し、その教育目的にそって人生の方針を転換しようとする者に対して、積極的に入学の門戸を開きたいと考え、編入学試験を実施している。入学を許可する学年は、1997年度以降、第3学年次のみである。

5. AO入学試験

前述2の帰国生徒・外国人留学生入学試験、社会人入学試験の入試形態は一般公募推

薦入試とともに2004年度入試から一元化され、AO入試として実施されている。AO入試においては、従来の学力試験では審査することの出来ない受験生の多彩な能力を評価できる入試形態として重視している。加えて、教会からの推薦、志望書、小論文、面接によって人物本位の選考を行い、「キリスト教伝道に携わろうとする志」を高く評価すると共に、その志を支援する教会の取り組みとその教会における受験生の具体的な活動をも評価している。

AO入試は、神学部の教育目的、また選考方法からして、キリスト教神学・伝道者コースで学ぶ学生を選抜するための入試と位置づけられている。

6. 一般入学試験

一般入試では、学力を重視した選抜方法をとっている。2003年度までは試験科目として英語・論文を採用し、これに面接試験を加えて選考した。2004年度コース制導入にともない試験科目の見直しが行われ、英語・国語・社会（日本史・世界史より選択）に変更し、一般入試における面接試験を廃止した。また受験資格は、バプテスマ（洗礼）を受けた者という従来の入学条件は、2004年度以降、コース制導入の趣旨に沿って問わないこととした。一般入試では、主に、キリスト教思想・文化コースで学ぶ学生を受け入れている。

（入試形態別の志願者数、入学者数等は、大学基礎データ 表13、表15を参照）

（点検・評価の結果）

従来の各種入試を整備しAO入試を導入したが、この入試形態は、「キリスト教の伝道に従事すべく選ばれたものを鍛錬する」という神学部の設立の理念を明確に表すものである。とくに資格別の入試では、問いにくかった志願者の個性を多角的かつ総合的に問える点で、いっそう効果的な選抜方法として機能している。

神学部では、このようにAO入試と一般入試を機軸として学生を受けて入れているが、入学者受入方針およびそれに基づいた選抜方法は神学部の理念・目的・教育目標に基づいたものであり、一貫していると判断される。しかしながら、キリスト教神学・伝道者コースの志願者は、AO入試と一般入試の2回の機会が与えられる一方で、キリスト教思想・文化コース志望者には一般入試のみが可能である点で若干検討の余地があるかもしれない。

また従来、社会人を資格とした入試は、一次と二次の年2回行われていたが、AO入試へ一元化した結果、受験機会が1回に削減されている。この点もあらためて評価すべきである。

新入試制度のAO入試はいまだ2回（2004年度、2005年度）の実績であり、バプテスマ（洗礼）を受けたか否かを問われない一般入試による入学生も2005年度現在、2年次になったところである。上記評価をさらに客観的に証明するためにも、いずれの入学生に関しても、受入方針や選抜方法、カリキュラムなどの検証を進める上で追跡調査を行うべく検討をしている。

2004年度以降、入試ごとに具体的な募集定員を設定している。

入試形態	2004年度	2005年度
AO入試募集定員	15名	15名
一般入試募集定員	15名	15名

現在まで、入学者は募集定員をほぼ満たしており、適切な配分であると考えられる。

入試選抜における課題設定であるが、AO入試においては、キリスト教に関連する現代的な社会問題や基礎的な文献に関する問題が出題されており、妥当な課題設定がなされている。また、一般入試においても、キリスト教の思想や文化を学ぶために必要な科目が採用されており、とくに英語についてはキリスト教や聖書についての設問が出題され、そのような事情をとくに配慮したものとなっている点で評価できる。

募集にあたっては、伝道者育成に限らず、幅広い分野で社会に奉仕できる知識・技能を育成することが可能な総合大学に位置していることは大きなプラス要因となっている。

(改善の具体的方策)

伝道者や社会に奉仕できる人材の育成には、幅広い学修や入学者の多様性が必要であり受入方針に関しても、AO入試ほかのあり方についてさらに検討を進める。そのために、入試検討委員会が設置され、検討が進められている。

また、2004年度以降入学生の追跡調査を実施して、受入方針や選抜方法について客観的なデータを整えることが必要であり、早期に、入試検討委員会によって企画・実施したい。

キリスト教思想・文化コースへの志願者の受験機会の拡大のためには、以下のような方向が考えられる。

1. 指定校推薦入試について、現在のところ、キリスト教神学・伝道者コースの学生だけを受け入れているが、キリスト教思想・文化コースの学生の受け入れの可否を今後検討する。
2. 編入学試験においても同様の検討をすすめる。
3. 社会人の資格による受け入れ機会拡大については、入試のための事務的な負担を再度検討して、あらためて社会人入試を別途導入するかを検討する。その際、選考方法において、AO入試を社会人の資格で受けるものと不公平が生じないように配慮する。
4. 多様な選考方法による学生受け入れを目指して、2006年度から、大学入試センター試験を利用した入試（4科目型）を導入する予定で、準備をしている。

【評価項目 5-0-2】 学生募集方法、入学者選抜方法

(必須要素) 大学・学部等の学生募集の方法、入学者選抜方法、殊に複数の入学者選抜方法を採用している場合には、その各々の選抜方法の位置づけ等の適切性

(現状の説明)

入試広報活動としては、多様な入学者選抜の方式を幅広く知らせるために、大学全体の広報活動の他に、神学部が独自に「神学部報」「後援会だより」などの広報印刷物を、全国のキリスト教諸教会、神学部卒業生、後援会員などに送付している。

また「キリスト新聞」「教団新報」などのキリスト教に関係の深い新聞メディア、「信徒の友」などの雑誌、その他の定期刊行物に、入試広告や神学部紹介などを掲載している。

さらに指定校推薦依頼校や、その他のキリスト教主義学校などへの学校訪問、また教会などへの訪問を精力的に行って、神学部への理解と支援を求めている。

募集方法の詳細については、入試部や広報室が作成した大学案内や入試ガイドブックによって広報活動を行っている。指定校推薦など募集は学校訪問を直接行うほか、キリスト教主義学校・キリスト教関連団体等へのパンフレット配付することにより行っている。

入試広報において特筆すべき活動として、毎年夏に神学部後援会支援により、主に高校生を対象として「献身キャンプ」を開催している。伝道者育成という神学部の伝統的な使命を果たすためには、広く高校生の中から、そのような志に相応しい人材を発掘することが必要である。献身キャンプでは、神学部で学ぶことを通して、将来、伝道者として生きようとする献身の志を育てるプログラムが実施され、同じ志をもつ学生同士の交歓の場となり、たがいに入学へむけて励ましあう関係などが築かれきわめて有効に機能している。

2004年度のコース制導入に際しては、大学全体の案内とは別に、コース制の概要および新しく導入されたAO入試を含めたパンフレットを作成し、全国のキリスト教会・関係諸学校に送付するほか、学校訪問の際に個別に進路指導担当教諭・宗教主事等に広報活動を行った。あわせて神学部独自のホームページを作成して、とくに一般入試の形態の変更、とりわけバプテスマ（洗礼）を受けているか否かを問わないなど出願資格の変更について志願者に注目されるよう努力した。

2004年度入試の入学者選抜方法

一般入試（募集人数15名）

試験科目：英語、国語必修、日本史、世界史から1科目選択

AO入試（募集人数15名）（社会人、帰国生徒、外国人留学生を対象として含む）

小論文を含む書類審査、面接

指定校推薦入試（キリスト教学校教育同盟加盟校20校：募集人数若干名）

協定校推薦入試（1校：募集人数若干名（3名以内））

関西学院高等部推薦入試（キリスト教神学・伝道者コース1名、キリスト教思想・文化コース1名）

社会人入試（募集人数若干名）（小論文を含む書類審査、面接）

3年次編入学試験1次・2次【年2回実施】（小論文を含む書類審査、面接）

2005年度入試の入学者選抜方法

一般入試（募集人数15名）

試験科目：英語、国語必修、日本史、世界史から1科目選択

AO入試（募集人数15名）（社会人、帰国生徒、外国人留学生を対象として含む）

小論文を含む書類審査、面接

指定校推薦入試（キリスト教学校教育同盟加盟校23校：募集人数若干名）

協定校推薦入試（1校：募集人数1名）

関西学院高等部推薦入試（キリスト教神学・伝道者コース1名、キリスト教思想・文化コース1名）

3年次編入学試験【年1回実施】（小論文を含む書類審査、面接）募集人数若干名

AO入試、編入学試験には、書類審査の一つとして小論文を課している。そのテーマは、キリスト教に関わるものであり、小論文を通して一般的な調査能力や文章能力を見ると共

に、キリスト教への関心と理解を評価している。

AO入試・指定校推薦・協定校推薦・3年次編入学試験は、キリスト教神学・伝道者コースで学び、将来、キリスト教の伝道者として広く活躍する入学者を求める選抜方法として位置づけられている。そのため出願時に、バプテスマ（洗礼）を受けていることが出願資格に定められている。

一般入試は、キリスト教を思想や文化として学ぶことを望む学生を受験の対象として設定しており、学力を中心とした選考方法をとっている。

（点検・評価の結果）

社会全体における18歳人口の減少という一般的社会状況、および近年のキリスト教会における若年層の減少していることは、軽視できない問題となっている。とりわけ、教会における若者の減少は深刻な問題であり、だからこそ、将来のキリスト教界を担う指導的人材をしっかりと育てることが、ますます重要となっていることを考慮すべきである。

そこで、神学部とその関係者が、若い人たちを育てる教会やキリスト教主義学校の働きに対して、相互的な連携を一層深め、志願者を募ることが必要である。毎年、神学部教員が分担して、神学部出身者が勤務するキリスト教主義学校を中心に15から20校の学校訪問を行い、懇切な入試広報と受験者の発掘をおこなっている。また、キリスト教会にも働きかけて、とりわけ継続的に献身キャンプなどの神学部独自のプログラムを行って受験者拡大の努力をしている。

選抜方法については、AO入試を中心とした人物重視の入試と、一般入試における学力を中心とした入試が、その位置づけ・実施内容とも、その目的に則して明確な運用がなされている。しかしながら、入試選抜方法の多様化が求められている中、新しい入試形態の可能性を探る必要がある。

（改善の具体的方策）

定員管理の点から、また入試形態の多様性をはかるため、大学入試センター試験利用入試の導入を検討しており、現在、2006年度入試から実施の予定である。今後も、入試検討委員会を通じて、多様性をもった入学者の選抜方法として適正化に努力し、募集方法について、入学者選抜方法に関してもスポーツ能力および文化・芸術活動に優れたものを対象にした入試方法の検討も考慮することにした。

【評価項目 5-0-3】 入学者選抜の仕組み

（必須要素）入学者選抜試験実施体制の適切性

（必須要素）入学者選抜基準の透明性

（選択要素）入学者選抜とその結果の公正性・妥当性を確保するシステムの導入状況

（現状の説明）

協定校・指定校推薦入試、関西学院高等部推薦入試、AO入試、編入学試験、そして一般入試など、多様な入試が実行されている。2003年度入試までは、少人数学部である制約から、一般入試の地方試験場は、神学部にとって一層関係を深めていくべき関東以北を

視野に、東京会場のみで実施していた。

2004年度入試からはコース制導入にともなって、一般入試における面接試験を廃止し、本学の地方入試会場すべてで受験することを可能とした。

また各種入試が個別の日程で実施されていたが、AO入試導入にともない一元化され、より効率的な運営が可能となっている。

AO入試においては、書類による選考・小論文による選考・面接による選考によって総合的な評価を行っている。書類選考に当たっては、一人の志願者に対して、複数（2-3人）の審査委員が評価を行い、その評価の基準などを確認しながら、公正かつ公平な評価に努めている。また面接試験においては、面接委員に質問者と観察者を役割分担して、より公正な評価を心がけている。以上の選考過程は、AO入試の募集要項に、選考のあらましを昨年度の概要として公表し、受験者の準備に役立つよう広く情報を提供している。

一般入試については、出題および採点作業もふくめて、全学部を上げて、全学態勢の中、入試部と協力しつつ実施している。

入学者選抜試験実施のために、各入学試験に実行小委員会（委員は2～3名）を設け、志願者の資格確認、提出書類の点検、試験の実施（面接の場合は、学部長が加わる）、合否判定の原案作成、教授会提案の職務を担っている。

それぞれの合格者の選考においては、入学者選抜基準に関して、教授会で申し合わせた一定の基準に従って、合否判定がなされ、教授会で再度十分検討を重ねて決定している。

（点検・評価の結果）

入試実施体制および入試選考に際しての透明性・公正性は、概ね妥当であると判断する。大学全体の入試委員会で検討され、決定された入試執行の新しいあり方に従いつつ、各入試の責任者を個々に定め、業務と責任を分担して、入試を実行しているが、入試制度の多様化に伴い、限られた人数の教職員の課題と責任が増大しつつある。限られた人員で適正な運営を行うために、より効率的な入試実施体制の確立が検討されるべきである。

AO入試の選考プロセスは、複数の教員で、多段階の評価を行っているため、その適正性や公平性は確保されていると認識している。しかしながら、卒業後相当年を経ている場合には、評定値を得られない場合があり、判断が難しい例もみられる。また、社会活動・スポーツ・音楽活動・教会活動など、領域の違う才能・成果を評価するため、その優劣の判断が困難な場合もみられる。十分説明のできる判断をくだすために、内部基準などを別途定めておく必要がある。

（改善の具体的方策）

2004年度のコース制の導入に伴って、当年度入学試験から実施方法を大幅に変更し、キリスト教神学・伝道者コースについては、一般公募推薦、帰国生徒、外国人留学生の各入学試験をAO方式に一元化したため、入試実行体制の負担は軽減したが、2006年度より大学入試センター試験を利用した入試を導入すると同時に、社会人入試の再導入を検討しているため、負担を十分に配慮した実施体制を、入試検討委員会で整備する。

AO入試の書類評価の基準については、実施後2年を経たのみであるため、さらに情報を

集めることが改善の前提であり、入試検討委員会において今後も継続的に検討する。

【評価項目 5-0-5】 アドミSSIONズ・オフィス入試

(選択要素) アドミSSIONズ・オフィス入試実施の実効性

(現状の説明)

神学部創立以来の伝統ある使命として担ってきたキリスト教伝道者の育成を目的としたキリスト教神学・伝道者コース志望者の受け入れを企図して、2004年度入試よりAO入試を実施している。

入試選抜の書類審査における小論文のテーマは、下記のようにキリスト教に関するものであり、選考の基準として適切な出題となっていると同時に、神学部の特色を表している。

2004年度小論文主題「マーティン・ルーサー・キングについて」

2005年度小論文主題「ルターの『キリスト者の自由』について」

また、AO入試に求められる提出書類（選考資料）は、バプテスマ（洗礼）証明書・教会推薦書、調査書、課外・社会活動報告書、志願者自身による志望理由書であり、志願者の学業を含めた能力・才能を示すものと、神学部で将来伝道者となるために学習する意欲を客観的に証明するものである。

これに加えて、面接試験が実施され、複数の面接委員によって提出書類の内容をあらためて確認するとともに、質疑応答をおこなって大学生に相応しいコミュニケーション能力を持つか否かを評価している。

キリスト教神学・伝道者コース学生のみを募集し、人員は入学定員30名のうち15名と定めている。志願者数は2004年度、19名、2005年度13名であった。この入試形態によって、社会人、帰国生徒、外国人留学生の受け入れも実施している。その内訳は以下の通りである。

志願者数・合格者数	2004年度	2005年度
社会人	8名・7名	1名・1名
外国人留学生	1名・0名	0名・0名
帰国生徒	0名・0名	0名・0名

* 社会人：2004年度は社会人入試およびAO入試において募集

2005年度はAO入試のみで募集

* 外国人留学生および帰国生徒：2004年度よりAO入試のみで募集

(点検・評価の結果)

現在、期待された目的にかなった形で、キリスト教神学・伝道者コース志願者のほとんどがAO入試によって入学している。しかしながら、学力面については、学校評定値および小論文によって間接的に知ることが可能であるに過ぎないため、大学で学ぶための十分な基礎学力を有しているかどうかを十分に判断する材料が乏しいという恨みがある。

今後、入学者の学力を担保するための基準や選考方法の設定を検討する必要がある。

募集に対し、志願者の数が少ないため（2004年度入試19名の志願者に対し、14名の合格者、2005年度入試 13名の志願者に対し、12名の合格者）、十分な選抜がむずかしい。

今後、志願者のさらなる発掘をして、選抜効果を高める必要がある。
実施後2年しか経過しておらず、その実効性については今後、追跡調査やアンケートによって客観的に検証をしていくことが必要である。

(改善の具体的方策)

志願者の確保のために、さらに入試広報を充実することがまず行われるべきである。その際、選考における提出書類・小論文の割合が大きいので、広報において、どのような点が評価されるのかを明確に情報を提供し、書類の準備を支援するように配慮し、志願しやすいようなあり方を考える。

また基礎学力の担保のために、現在、行われている判断基準以外に、他の尺度を導入するかを検討する。

【評価項目 5-0-7】 入学者選抜における高・大の連携

- (選択要素) 推薦入学における、高等学校との関係の適切性
- (選択要素) 入学者選抜における、高等学校の「調査表」の位置づけ
- (選択要素) 高校生に対して行う進路相談・指導、その他これに関わる情報伝達の適切性

(現状の説明)

関西学院高等部からの推薦、キリスト教学校教育同盟加盟校のうち神学部出身の聖書科教師や宗教主事などが勤務している学校23校を指定校推薦校としている。関西学院高等部からの推薦はほとんどなく（過去5年間ににおいては2001年度に1名があったのみ）、指定校推薦も例年1～2名程度である。

(点検・評価の結果)

伝道者や広く社会に奉仕する人材のための進路相談・指導はかなり困難である。

(改善の具体的方策)

伝道者のみならず社会に奉仕するための具体的なイメージを模索する必要がある。そのことをしっかりと情報提供することを検討する。

【評価項目 5-0-8】 社会人学生の受け入れ

(現状の説明)

AO入試出願資格に社会人を含めている。毎年数名の社会人入学者があり、2003年度入学生1名、2004年度3名、2005年度4名であった。その全学生に対する割合は次のとおりである。

2004年度社会人学生数（社会人入試あるいはAO入試による）

7名／（113名）＝学部学生の6.19%

2005年度社会人学生数（社会人入試あるいはAO入試による）

8名／（116名）＝学部学生の6.90%

入試形態を、社会人入試からAO入試に変更しても、従来とほぼ同数の受験者と合格者があらわれている。また、社会人から入学した学生は、志望動機がきわめてはっきりしている例が多いので、高校から直接入学し成長の途上にある若い学生にとっての良い刺激となっている。

その一方で、従来の入試制度に比べ受験機会が半減している。今後、その影響を注視する必要がある。

(点検・評価の結果)

AO入試による選抜であるため、大学で学ぶための基礎学力、とりわけ英語などの外国語能力を事前に審査することが困難である。

受験機会が減ったことは事実であるが、その影響は十分に評価できる段階にない。

(改善の具体的方策)

基礎学力の担保の問題は、AO入試の改善としてあわせて対策を検討したい。社会人の受け入れの機会の複数化は、入試の実施体制の負担と勘案しつつ、今後も検討を続ける。

【評価項目 5-0-9】 科目等履修生、聴講生等

(選択要素) 科目等履修生、聴講生等の受け入れ方針・要件の適切性と明確性

(現状の説明)

現在、科目等履修生、聴講生等の希望者は増加傾向にある。社会が多様化し、さまざまな領域に関心が広がるにあたって、人々は神学への関心を深めている。とりわけプロテスタントのキリスト教会は伝統的にその信仰内容を学ぼうとする意欲が高い上に、近年の高齢化進展による生涯学習への関心の高まりがその背景にあると考えられる。

現在は、面接により選抜を行い、そこで希望者の勉学への関心事と意欲を把握してから、科目等履修および聴講を許可している。これまでキリスト教神学の学習に必要な語学力などについては評価していないが、入学後に大きな支障は報告されていない。しかし、履修・聴講科目を広げるとすれば(例えば、ゼミなど)、語学等の試験が必要になることも考えられる。

(点検・評価の結果)

現行での受入方針や要件について、大きな問題点はなく、適切に機能していると考えている。しかしながら、教室定員などの問題から、正規学生が必修となる専門基礎科目については、聴講生の受講を認めていないので、これが適切か否か、今後の検討課題のひとつとなっている。

(改善の具体的方策)

科目等履修生、聴講生の履修できる科目の吟味を行うことが求められる。ただ受講者の希望で履修するのではなく、学習意欲を触発するために、ある目的を明確化した学習過程

を定めて企画することの可能性とあわせて、教務主任を中心に検討する。

【評価項目 5-0-10】 外国人留学生の受け入れ

(選択要素) 留学生の本国地での大学教育、大学前教育の内容・質の認定の上に立った学生受け入れ・単位認定の適切性

(現状の説明)

AO入試に、受験資格として外国人を定めて受け入れている。これまで「留学」ビザで入学した学生以外にも、「宗教」ビザによって入国している学生を受け入れている。

AO入試には、小論文が課せられており、これによって志願者が大学で学ぶために十分な日本語運用能力を実際に有しているかを判断している。

また入学後は、1年次に「日本語Ⅰ甲A・B」「日本語Ⅰ乙A・B」、2年次に「日本語Ⅱ甲A・B」「日本語Ⅱ乙A・B」が必修となっており、さらなる日本語能力が研鑽できるよう配慮されている。

入学者の本国での大学教育や大学前教育については、神学部という特性から、キリスト教会関係の受験生に限られるので、出身国のキリスト教関係の情報や資料にもとづいて、その的確性を判断している。

(点検・評価の結果)

小論文等の書類を作成、提出し、また面接を行うため、日本語能力に関する十分な審査をへてから入学を許可しているため、学修上の大きな問題は報告されていない。しかしながら、入学後の配慮が十分に行き届いているかを組織的に把握しているわけではないので、今後、支援体制の充実とともに調査の必要がある。

(改善の具体的方策)

教務主任および学生主任を中心に、修学面および生活面の適切な支援のためのあり方を、今後、検討する。